もっと知りたいふるさと 32

さらしなは"地名遺産"

冠着山の麓に更級地区と呼ばれる地域があります。昭和の市町村合併（一九五五年）の前まで「更級村」だったことから現在も村の名を残し、そう呼ばれています。

私は地元の更級小学校を卒業。中学で、平安時代の都の貴族女性が村の名前を題名にした『更級日記』を書いたのを知りました。なぜなのか調べてきて、分かりました。さらしなは、古代から京の都人たちの強烈なあこがれだったのです。

平安時代の都人は雪月花という言葉に象徴されるように、白を「至高の色」とする美意識を育みました。神社の神官の装束が白であるように、白色には神聖、高貴、清潔、純粋などのイメージが重ねられていました。さらしなも白色を連想させる「さらす」「サラサラ」などの言葉と音の響きが似ているため、同様のイメージを都人はさらしなに抱いたのです。

証明する材料はたくさんあるのですが、ここでは江戸幕末に京都の貴族歌人が詠んだ和歌を紹介します。更級地区若宮にある佐良志奈神社の社標に刻まれています。

佐良志奈神社の社標和歌

月のみか
露霜しぐれ雪までに
さらしさらせるさらしなの里

露や霜もいつの間にか雪に変わった、月の光を浴びて白いさらしなの里の純白さがより一層際立っている・・・月だけでなくすべてのものが真っ白になった里、それがさらしなの里、という意味です。

当時の宮司豊城直友さんが上京して歌の名家に依頼したもので、平安から千年の後も、「さらしな」に至高の白色を見る美意識が受け継がれてきたことが分かります。

さらしなは「月の都」としても都に知られ、都人のあこがれ感がよく分かる和歌も紹介します。豊臣秀吉です。

さらしなや
雄島の月もよそならん
ただ伏見江の秋の夕暮れ

「雄島」は宮城県松島湾に浮かぶ一つの島で、松島も月の美しさが都に知られていました。「伏見江」は秀吉が築いた伏見城下（京都市伏見区）に広がっていた巨椋池（現在は埋め立てで消滅）のことで、湖面が月光を美しく反射させていたのでしょう。

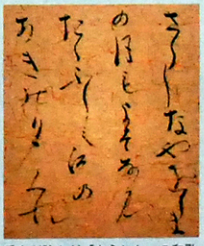
秀吉のこの歌は、名月で知られる更級や松島も伏見の月の美しさにはかなわないとお国自慢したもの。裏返せばそれだけ強いあこがれをさらしなに抱いていたわけです。

秀吉より百年余り後の松尾芭蕉も秀吉と同じあこがれを抱き、当地を訪れ紀行文『更科紀行』を書きました。

「さらしな」の月をより美しく見せる舞台装置、千曲川の役割も強調したいと思います。古来、月の名所は先の松島をはじめ、月の光を反射させ白光空間を演出する海や池など水がある所です。冒頭で触れた雪月花という言葉にあるように月も白い輝きが美しいとされてきました。「月の都・さらしな」の誕生には、千曲川が演出する月の白さと、純白をイメージさせる「さらしな」の地名の響きが大きく関係しています。

二〇〇五年、大岡村が長野市と合併し「更級郡」は消滅。更級という行政区画名はなくなったので、地区名として千曲市に定着している「さらしな」は地名遺産です。世界に誇っていい地名です。

さらしな堂代表　大谷善邦



秀吉が詠んだ「さらしな」の和歌
（京都市の高台寺所蔵品の図録から）

編集後記

光の春が来た。今年は、雪の多い厳しい冬であった。

「悲しみに耐えるものにだけ、見ることが許される世界がある」のだという。冬を耐えて、次にどんな美しい季節を見せてもらえるのだろう。

夏には「この暑さに負けないくらい熱く生きてやる！」と、私は強気で乗り切った。冬には抗うことなく、静かに春の訪れを待った。

病や老いを前にしても「負けてたまるか」と強い精神力で闘えれば素晴しいと思う一方で、すべてを委ね現実を受入れて生きる、しなやかな在り方に心惹かれる。

百歳でフェイスブックを始めたという日野原重明医師が昨年秋の上田での講演会で、「新しいことを創めればあなたはいつも若い」と語った。各公民館で成人講座の受講生を募っている。何ごとも頑張り過ぎず、楽しんでできたらいいと思う。

新しい一歩を踏み出すのに最適な春。わくわくすることを見つけませんか。

埴生・E

発行／千曲市公民館運営協議会　編集／千曲市公民館館報編集委員会　電話026－276－5842　FAX026－276－7330　印刷／寺沢印刷